スラブ・ユーラシア研究センターニュース　季刊　2017年 151 号

SLAVIC-EURASIAN RESEARCH CENTER NEWS No. 151 November 2017

研究の最前線

◆　2017 年度冬期国際シンポジウム　◆
《ロシア革命と長い 20 世紀》開催予告

ロシア革命から 100 年目の今年は、国内外で数多くの関連研究集会が開かれています。センターの冬期シンポジウムも「ロシア革命と長い 20 世紀」というテーマを設定しました。「短い 20 世紀」論としてはエリック・ホブズボームが有名ですが、これは第一次世界大戦からソ連が生まれ、冷戦を経てソ連が解体するまでを 20 世紀として捉えるものでした。それに対して近年では、19 世紀末の帝国主義の時代に植民地で実験・実践されてきた暴力が、第一次世界大戦でヨーロッパ、さらにはロシアの国内戦にまで還流していたことがよく指摘されています。また、現代世界を眺めてみても、集権的な権力が揺らぎ、あるいは消失した後に人々がどのように秩序形成を目指すのか、そして民主主義や解放の理念の名の下での介入が合理的なのかという、ロシア革命とソ連から派生する問いがこんにちもなお問われ続けていることに気付きます。19 世紀末からこんにちを含むような「長い 20 世紀」の中にロシア革命を置いてみることは、単に社会主義とは何だったのかという問いを越える様々な問いを立てることになるのです。

シンポジウムの 1 日目は、20 世紀初頭の立憲革命の波を切り口に世紀転換期のロシアがユーラシア大陸で占めた位置を確認することから始まり、戦間期と冷戦期における世界とソ連との相互関係について、主に経済と文化の観点から考察します。2 日目は、1917 年の意味を再考することから始め、革命・内戦のロシア周辺への波及、そしてこんにちにつながる戦後ソ連社会への影響を考えるものになります。なお、シンポジウム前日の夕刻には、共同利用・共同研究「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」の「近現代の中央ユーラシアに関する共同研究班」の成果の一部として、ワークショップ「戦争と社会秩序の変容：ロシアによる中央アジアとコーカサスの征服」が開かれます。これは、当該研究班の長沼秀幸さん（日本学術振興会）が組織したものです。こちらも奮ってご参加ください。［長縄］

12 月 7 日（木）

1. ユーラシアにおける立憲革命の連鎖 10:00-12:00

フーリー・ベルベリアン（カリフォルニア大学、米国）「革命で結ばれて：コーカサス、イラン、オスマン領アナトリア、アルメニア人」
藤波伸嘉（津田塾大学）「狭間の憲法：クレタ、オスマン人の特権からギリシア人の国へ」
デイヴィド・ブロフィ（シドニー大学、オーストラリア）「危機の封じ込め：中国ムスリムにとっての辛亥革命、世界大戦、〈汎テュルク主義〉への西洋人の反応」
討論：吉村貴之（早稲田大学）　司会：鶴見太郎（東京大学）

2. 戦間期の世界秩序におけるソ連の位置 13:15-15:15

サミュエル・ハースト（ビルケント大学、トルコ）「ソ連の石油とトルコのオレンジ：反帝国主義、二国間貿易、国民経済の発展」

長縄宣博（センター）「反帝国主義の帝国：中央アジア、イラン、紅海に入り込むソヴィエト権力（1920 年代）」

ウィリアム・チェイス（ピッツバーグ大学、米国）「人民戦線、反ファシズム、〈ブルジョワ民主主義〉革命の可能性と難題：スペインとメキシコのコミンテルン（1935-1940）」

討論：ディビッド・ウルフ（センター）　司会：田畑伸一郎（センター）

3. 共産主義と資本主義の交わる場所 15:30-17:30

前川一郎（創価大学）「冷戦と脱植民地化:東側のアフリカ進出に対するイギリスの反応（1960 年代）」

カムラン・アスダル・アリ（テキサス大学、米国／LUMS、パキスタン）「人民の文学へ：ソ連の文化政策と南アジアの進歩主義作家運動」

ズビグネフ・ヴォイノフスキ（ナザルバエフ大学、カザフスタン）「停滞からペレストロイカのポップミュージック：どのように経済改革が東欧の文化的連携を損ない、それがなぜよかったのか」

討論：藤沢潤（神戸大学）　司会：望月哲男（北海道大学）

12 月 8 日（金）

特別報告 10:00-10:30

宇山智彦（センター）「日本におけるロシア革命とソ連の研究：帝国史の観点から」

4. 1917 年のペトログラード、国境地帯、国際環境 10:30-12:30

池田嘉郎（東京大学）「ロシア革命における主権者の表象の危機」

ピーター・ホルクィスト（ペンシルベニア大学、米国）「革命としての占領：ロシア軍の占領地における 1917 年（東アナトリアとオーストリア領ガリツィヤ）」

ショーン・マクミーキン（バード大学、米国）「ロシア革命と戦争（1917-1918）」

討論：佐原徹哉（明治大学）　司会：橋本伸也（関西学院大学）

5. 内戦と干渉下での国家建設 13:45-15:45

アミナト･チョコバエヴァ（オーストラリア国立大学）「壊れた桶：セミレチエの内戦（1916-1921）」

オリバー・バスト（パリ第 3 ソルボンヌ・ヌーヴェル大学、フランス）「壮大な計画と予期せぬ帰結：イランへの 10 月革命の衝撃度を測る」

ヤロスラブ・シュラトフ（神戸大学）「帝政からソヴィエトへ：革命後ロシアの対日政策」

討論：宇山智彦（センター）　司会：小松久男（東京外国語大学）

6. 未完の革命？ 16:00-18:00

ニコライ・ミトローヒン（ブレーメン大学、ドイツ）「未完の内戦の再発：ソ連エリート内部のイデオロギー的集団と親族的つながり（1960 年代から 1970 年代）」

アンナ・ソコロヴァ（ロシア科学アカデミー民族学・人類学研究所）「未定」

ユリアネ・フュルスト（ブリストル大学、英国）「革命のブーメラン：ヒッピーとその同類はどのように革命を再びソ連に持ち込んだのか」

討論：松井康浩（九州大学）　司会：高橋沙奈美（センター）

◆　国際シンポジウム「北極域における環境・開発・国際関係」開催予告　◆

北極域研究推進プロジェクト（ArCS）テーマ 7：北極の人間と社会：持続的発展の可能性主催で国際シンポジウムが開かれます。ご関心のある方はどなたでも参加できます。参加を希望される方は、サイト上の登録フォームからご登録をお願いします。［後藤］

International Symposium on Environment, Development and International Relations in the Arctic

Organized by Arctic Challenge for Sustainability (ArCS), People and Community in the Arctic: Possibility of Sustainable Development (Theme 7)
Cosponsored by the Slavic-Eurasian Research Center and the Arctic Research Center, Hokkaido University
Dates: December 11-12, 2017　Venue: Centennial Hall, Hokkaido University

December 11

13:30 Opening

13:40-14:10 Keynote speech

Keiji Ide, Ambassador in charge of Arctic Affairs, Ministry of Foreign Affairs of Japan

14:10-16:10 Session One: Recent Development of International Relations in the Arctic: Who Will Be the Key Game Maker in Coming Years?

Chair: Juha Saunavaara, Arctic Research Center, Hokkaido University

Sebastian Knecht, Berlin Graduate School for Transnational Studies
Hiroshi Yamazoe, Regional Studies Department, National Institute for Defense Studies
Fujio Ohnishi, Arctic Research Center, Hokkaido University

Discussants: Nikolas Sellheim, Polar Cooperation Research Center, Kobe University; Rasmus Gjedssø Bertelsen, Department of Science, UiT The Arctic University of Norway

16:30-18:30 Session Two: Frontier of Economic Development: The Case of Yamal Peninsula

Chair: Elena Shadrina, Waseda University

Masumi Motomura, Japan Oil, Gas and Metals National Corporation (JOGMEC)
Andrei Golovnev, Peter the Great Museum of Anthropology and Ethnography (Kunstkamera)
Arbakhan Magomedov, Ulyanovsk State University

Discussant: Florian Stammler, Arctic Centre, University of Lapland

18:30- Reception

December 12

10:00-12:00 Session Three: Arctic Societies in Anthropocene: Biocultural Survival, Indigenous Knowledges, and Scientific Networks

Chair: Shiaki Kondo, Center for Ainu and Indigenous Studies, Hokkaido University

Keiichi Omura, Osaka University
Florian Stammler, Arctic Centre, University of Lapland

Discussants: Heather Swanson, Aarhus University; Hiroki Takakura, Tohoku University

12:00-12:10 Closing

◆　NIHU 北東アジア地域研究事業　◆
国際シンポジウム「安全保障の視点から考える移民・難民と環境問題」開催報告

2017 年 10 月 29 日（日）に東北大学川内キャンパスで、国際シンポジウム「安全保障の視点から考える移民・難民と環境問題」が開催されました。本シンポジウムは、NIHU 北東アジア地域研究推進事業・東北大学北東アジア研究センター拠点と北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター拠点の共催で、二つのセッションと全体討論から構成され、参加者は約 50 名でした。

第 1 セッション「北東アジアにおける移民・難民問題」では岩下明裕（北海道大学）が司会を務め、報告者は池直美（北海道大学）、三村光弘（ERINA）、福原裕二（島根県立大学）、

セルゲイ・ゴルノフ（九州大学）でした。報告者はそれぞれが専門とする北東アジアの国・地域において、移民が安全保障問題に与える影響について論じました。池報告では、10年にわたっておこなわれた中国、韓国、フィリピン、ベトナムの女性へのインタビュー調査から得られた知見が発表されました。池は、3人の女性の「結婚移民」としての体験と、日本と韓国における「家事・介護労働者」に関心を抱いており、どちらの社会もこうした女性らの人権を守ることができるはずであると主張しました。

三村・福原報告も、モンゴルの建設現場で働く北朝鮮人男性たちと、彼らの雇い主たちへのインタビューに重点をおいたものでした。三村は、福原の綿密なフィールドワークの細部のコンテクストを説明し、これらの労働者の経験をモンゴル―北朝鮮関係のフレームワークの中に位置づけました。この報告は、労働者たちの経験がいかに国際政治―特に米国がモンゴルに及ぼしている北朝鮮への支援削減を求める圧力―の影響を受け始めているかを示してくれました。

3番目のゴルノフ報告では、現地のメディアで報道されるロシア人の政治家と官僚の発言が考察されました。ゴルノフ教授は、ロシアでの中国系移民に関する認識が、「警鐘主義」と「功利主義」の両極の間に存在することを明らかにしました。一方では中国系移民に対して安全保障上の脅威として批判的なビジョンをもつ政治家がおり、他方では、実利主義的なアプローチをとり、こうした移民を経済的恩恵とみなして奨励するのを厭わない政治家もいて、中国の経済が強力になってゆくほど、中国人にとって移住をおこなう動機は乏しくなるという見解で報告は締めくくられました。さらに、より高い賃金に惹かれるなら、ロシア人にとって中国への移住はより魅力的になってゆくとも述べられました。コメンテーターの朴鍾碩（九州大学）は、パネリストと参加者に向けていくつかの新しい重要な視点を提示しました。そのなかには、女性移民の議論における「仲介者」の役割や、北朝鮮を語る際に用いられる用語に対する問いが含まれました。

ニナ・ホール氏の報告

第2セッション「移民・難民と環境問題」では、明日香壽川（東北大学）が司会を務めました。最初の報告者ニナ・ホール（ジョンズ・ホプキンズ大学高等国際研究大学院ボローニャ校）は、国際連合難民高等弁務官事務所（UNHCR）や国際移住機関（IOM）といった国際組織が、気候変動による移住の課題に取り組む際、いかに与えられた権限を活用してきたかについて述べました。第2報告では、ジョン・キャンベル（ニュージーランド国立ワイカト大学）がキリバスの住民が直面している気候変動がもたらす危機についての自身の調査を紹介しました。かつての植民地宗主国である英国はキリバスの人々に負っている責任をもっと自覚すべきだというキャンベルの見解は、報告の中心ではなかったものの、参加者の関心を引きました。最後の報告者であるブノワ・メイヤー（香港中文大学）は、移住をもたらす個々の要因として気候変動を議論するよりも、大学人や政策立案者は「気候移民の連鎖性」について考えるべきだと主張しました。メイヤーは国際法の例を引きながら、気候変動とは、移住をもたらす多数の要因のうちの一つであり、それらは複雑に絡まりあい、個別に分離することが不可能なものであることを検証しました。セッションはオノ・ケンタロウ（在仙台キ

リバス共和国名誉領事）のコメントで締めくくられました。彼は大学人らに対して、キリバスの人々に対して「気候難民」というレッテルを張らないでほしいと主張し、その代わりに、「尊厳のある移民」を強調する新しい用語について考えを巡らすよう促しました。

ラウンドテーブルのようす

二つのセッションに続き、シンポジウムは全体討論で締めくくられました。オノ氏の主張を出発点として、いかに日本における難民に対する無知を克服するべきかという議論が起こりました。具体的には、ある留学生が、政策立案者はバングラデシュのような資源が限られた国の人々に対して何ができるのかと問いかけたのです。パネリストたちは、単純な解決方法はないにしても、移民を特定の安全保障問題としてのみ捉えるあり方に警鐘を鳴らしました。シンポジウムのタイトルが「安全保障の様々な視点（security perspectives）」を強調しているように、移民と難民に対する人道的なアプローチの重要性を喚起することが望ましいとされました。［ジョナサン・ブル／英語から上村正之　訳］

ラウンドテーブルで発言する岩下拠点リーダー

◆　2017 年度特任教員（外国人）決定　◆

2017 年度の外国人特任教員として以下の 6 名が採用され、すでに赴任されています（以下、アルファベット順）。2018 年度の教員募集は、すでに締切りが過ぎたところです。［大須賀／山村］

ヤンチャク、ヤロスワフ（Jańczak, Jarosław）
所属・現職：アダム・ミツキェヴィチ大学政治学ジャーナリズム学部　准教授
研究テーマ:ユーラシアでの統合プロジェクトにおける国境の構築と脱構築:ロシアの「西端」および「東端」の事例
滞在期間：2017 年 6 月 5 日～ 8 月 29 日
受入教員：岩下

クズネツォフ、セルゲイ（Kuznetcov, Sergei）
所属・現職：イルクーツク国立大学世界史・国際関係学部　教授
研究テーマ：露日関係：19-20 世紀の外交と外交官
滞在期間：2017 年 6 月 3 日～ 2018 年 3 月 26 日
受入教員：ウルフ

マリコフ、アジム（Malikov, Azim）
所属・現職：ウズベキスタン科学アカデミー歴史学研究所　上級研究員
研究テーマ：トルキスタン総督府における〈聖なる家系〉（1867-1917）：社会・文化的変容
滞在期間：2017 年 10 月 3 日～ 2018 年 3 月 26 日
受入教員：宇山

シプカ、ダンコ（Šipka, Danko）
所属・現職：アリゾナ州立大学国際文学・文化学部　教授
研究テーマ：スラヴ地域の文化アイデンティティにおける語彙の層
滞在期間：2017 年 8 月 5 日～ 10 月 17 日
受入教員：野町

ススロフ、ミハイル（Suslov, Mikhail）
所属・現職：コペンハーゲン大学横断文化地域研究学部　助教
研究テーマ：十字架と宇宙基地：現代ロシア文学における宗教的空想科学小説
滞在期間：2017 年 6 月 1 日～ 8 月 14 日
受入教員：越野

ヴィクトロフ、イリヤ（Viktorov, Ilja）
所属・現職：ストックホルム大学経済史学部　講師
研究テーマ：ロシアの通貨パワーの自律性とその限界
滞在期間：2017 年 7 月 1 日～ 9 月 30 日
受入教員：田畑

◆　黒竜江省社会科学院代表団の訪問　◆

代表団との記念撮影（撮影者は野町教授）

11 月 4 日（土）に黒竜江省社会科学院代表団がセンターを訪問されました。黒竜江省社会科学院とセンターとの間では 2010 年に部局間交流協定が締結されており、相互に研究員を派遣したり、双方のセミナー等に参加したりするなど、交流が続けられてきました。今回の代表団には、武鳳呈（黒龍江省社会科学院党委書記）、笪志剛（同院北東アジア研究所所長）、安兆禎（同院ロシア研究所副所長）、董暁鐘（同院文献情報センター研究員）の 4 名が参加されました。意見交換では、センターが現在重視している北東アジア研究、中露関係研究、ボーダースタディーズなどの分野で今後も協力を続け、さらに発展させていくことが確認されました。［田畑］

◆　ハイルルダエヴァ氏とムルザホジャエフ氏の滞在　◆

アルファラビ・カザフ国立大学歴史・考古学・民族学部の 2 人の大学院生（博士課程）が、同大学の研修プログラムによりセンターに滞在しています。2 人の氏名、滞在期間、研究テー

マは以下の通りです。［宇山］

Aisulu Khairuldayeva（アイスル・ハイルルダエヴァ） 2017 年 9 月 24 日～ 11 月 25 日
Kazakhstan's Relations with the Central Asian States in the 18th and the First Half of the 19th Century in Local Historiography

Kuanysh Murzakhojayev（クアヌシュ・ムルザホジャエフ） 2017 年 10 月 7 日～ 12 月 7 日
Cultural and Educational Activities of Jadids in Kazakhstan in the Late 19th – Early 20th Century

◆ 専任・非常勤研究員セミナー ◆

ニュース前号以降、専任研究員セミナー等が以下のように開催されました。

9 月 26 日：**宇山智彦**「ロシア・ムスリムの革命と〈反革命〉：〈想像の帝国〉との協力と闘い」
コメンテータ：西山克典氏（静岡県立大学名誉教授）

提出ペーパーは、本人が編集した『越境する革命と民族（ロシア革命とソ連の世紀 第 5 巻）』（岩波書店）（本号の 13 頁参照）に収録された原稿で、参考ペーパーとして、同書の総説「ユーラシア多民族帝国としてのロシア・ソ連」の原稿も配布されました。提出論文は、1917 年の革命と内戦のなかで、旧ロシア帝国のムスリム諸民族がどのように自立・自治を実現させようとしたのかを跡付けるもので、従来のボリシェヴィキ中心史観を解体することを意図した意欲的な試みでした。討論のなかでは、「想像の帝国」という概念に関してもっとも多くのコメントが出ました。さらに、報告者が批判するタタール・ヘゲモニー論や報告者が主張する個別主義などについても、いろいろなコメントが出ました。［田畑］

11 月 6 日：**越野剛**「ドストエフスキーとロシアにおける病気の文化史：序論」
コメンテータ：望月哲男氏（北大名誉教授）

提出ペーパーは、執筆中の博士論文の序論であるということですが、内容としては、ドストエフスキーという作家と病気の関係の言説史というものでした。文学の領域に留まらず、文学による病気の文化史といった感じの幅広い領域をカバーするもので、報告者の得意とするジャンルだと思われました。討論のなかでは、序文として、報告者の文化史論あるいは文化史の方法論をより明示的に打ち出すなど大きな議論が必要ではないかとか、各章をどう結び付けるかについて、より明確に説明すべきではないかなどの意見が出されました。とくに、病気に関わるドストエフスキーについての分析と病気の文化史との関係に関して、報告者の考えを問いただすような質問・コメントが多かったように思われました。［田畑］

11 月 9 日：**ジョナサン・ブル** "Setting the Unsettled: Karafuto Repatriates and the Work of the Hakodate Regional Repatriation Centre, 1946-50"
コメンテータ：Steven Ivings 氏（京都大学大学院経済学研究科）

提出されたペーパーは現在 *Journal of Contemporary History* に投稿中の論文で、ペーパーとともに査読者からのコメントも合わせて提出されました。コメンテーターからは投稿を予定している雑誌の位置付けの高さ、およびそこへの投稿に対して大幅な修正を必要とするものの掲載は可能であるとされた点に対する評価がなされた上で、今後掲載のためにどのような対応が必要となるかということに関する多数のアドバイスがなされました。これに関しては、当日参加していた助教や研究員の方々が今後欧文雑誌に論文を投稿する際にも、参考となる点が多数あったかと思います。その後の質疑では、論文の構成に関するアドバイスや、タイトルにおける "the Unsettled" の意味、コロニアリズムに関わる概念の位置付け、利用した資料、特にインタビューの扱いについてなどのコメントがなされました。［仙石］

◆ 研究会活動 ◆

ニュース 150 号以降、センターでおこなわれた諸研究会活動は以下の通りです。［大須賀］

8 月30 日 Natalia Ryzhova（極東連邦大、ロシア）“Development Paradoxes of the Russian Far East: Illusions and Disillusionment”（NIHU セミナー）

9 月 4 日 鈴川・中村基金奨励研究員セミナー **田中沙季**（早稲田大・院）「Ф.M. ドストエフスキイのプーシキン演説：『エヴゲーニイ・オネーギン』のタチヤーナのイメージをめぐって」

9 月 8 日 鈴川・中村基金奨励研究員セミナー **菅井健太**（東京外国語大・院）「ブルガリア語北東方言における接語重複の文法化をめぐって」

9 月27 日 鈴川・中村基金奨励研究員セミナー **イーホル・ダツェンコ**（名古屋大・院）「Iazychie のモデルとしてウクライナ語に翻訳されたオーストリアの法律文書 (1849-1895)」

9 月29 日 第 22 回スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会 **仙石学**（センター）「東欧におけるポピュリズムとネオリベラリズム」

10 月10 日 開始、8 回連続 **アリベイ・マムマドフ**（北大・院）「連続講義〈アゼルバイジャンの多文化主義〉」

10 月12 日 Paul Wexler（テルアビブ大、イスラエル）「新領域〈アフロ・ユーラシア（シルクロード）言語学〉と東・西スラブ諸語再構への貢献」（センター特別セミナー）

10 月16 日 Danko Šipka（アリゾナ州立大、米国）“Lexical Layers of Slavic Cultural Identity”（センターセミナー）

11 月 2 日 **後藤正憲**（センター）「ロシア農村の企業家たち：チュヴァシとサハの事例から」（北海道スラブ研究会）

人事の動き

◆ 教　授 ◆

長縄宣博准教授、野町素己准教授は、2017 年 10 月 1 日付で教授に昇任しました。［仙石／事務係］

◆ 事務職員 ◆

田中佐知子事務補佐員は退職されました。
新任紹介：中川裕子事務補佐員（事務室）［事務係］

北極圏大学（UArctic）学長フォーラムに参加して

高橋美野梨（センター）

自然環境を人間との関係から切り離して対象化する「科学（Science)」と、人間が自然環境と密接な係わりを持ち、それに巻き込まれる存在であることを前提とする「Indigenous Knowledge や Traditional Ecological Knowledge を含む在来知（以下、在来知)」とは、いかにして共存し、協働することができるのだろうか。

上記の問いは、直接的・間接的にかかわらず、近年の北極研究の領域で、頻繁に耳にするようになりました。そもそも、科学と在来知とを二項対立的に捉える思考は、人間と環境の関係をどのように解釈するか、ということと係わります。一方の科学は、人間と環境の関係を二元論的に捉え、還元主義的、客観的、分析的且つ機械論的に理解しようとするのに対して、在来知はそれを一元論的に捉え、全体論的、直感的、経験的且つ精神論的に理解しようとします。もっとも、この対照性は、先行するいくつかの研究で指摘されてきたように、それらが語られ、流通される際に創出された差異に過ぎません。科学に直感を排除する機能が備わっているわけではないし、在来知に分析を拒む意図があるわけでもないからです。ただ、こうした整理は、科学と在来知とを、分析可能な概念として操作化することに貢献する可能性を有しています。

アバディーン大学キングス・カレッジ

2017 年 8 月 23 日～ 25 日にかけて、英国スコットランド・アバディーン大学キングス・カレッジにて、「The Inhabited Arctic: Lands, Peoples and Scholarship in the Circumpolar North」と題する北極圏大学・学長フォーラム（UArctic Rectors' Forum）が開催されました。北極圏大学（University of the Arctic）は、北極圏の持続的な発展を目的とする教育研究機関ネットワークで、北海道大学は日本で唯一のメンバー校となっています。今回の学長フォーラムでは、基調講演やビジネスミーティング、学生ミーティングと同時に、下記 3 つのパネルが立てられ、情報共有・交換が行われました。

◇ Panel 1: How can disciplines in the natural sciences and in the social sciences and humanities work together to advance our understanding of the circumpolar North?
◇ Panel 2: How can research best assist inhabitants of the North in responding to the challenges of global environmental change?
◇ Panel 3: How can the knowledge and wisdom of northern peoples help to shape the agendas for future circumpolar research?

パネルディスカッション

私は、パネルの全ての議論を聴講し、うちパネル3にはパネリストとして参加する機会を得て、北極圏大学メンバー機関の代表者（学長、副学長、役員等）が、北極研究に対してどのようなパースペクティブを持っているのかを直接知る濃密な時間を過ごすことができました。冒頭の問いは、3つのパネルに共通する、あるいは起点となる問題意識として、パネルの議論を規定するものでした。そこから導き出されるエッセンスは、学問が、法則的科学の追求としてのみ存立しているのではなく、人間が織り成す「非法則的」な行動を「納得の方法」に読み替えていくことをも目的としている、というナイーブだけれど、基本的な姿勢であったように思います。

科学と在来知とを結び付ける取り組みは、例えば、先行プロジェクトの一つである、The Meaning of Ice, Siku-Inuit-Hila (Sea Ice-People-Weather) Project 2007-2009 に具現化されています。本プロジェクトでは、グリーンランド（Qaanaaq）、アラスカ（Barrow=Utqiagvik）、ヌナヴト（Clyde River=Kanngiqtugaapik）を跨いで、ハンター、古老、研究者の相互派遣を行いながら、海氷の増減・流動について調査がなされました。そこでは、人文社会科学者、自然科学者だけでなく、地元民が計画段階からプロジェクトに係わると同時に、一般的なプロジェクトで実施される〈外部→地元民〉のインタビューだけでなく、〈地元民→地元民〉の形でインタビューが実践されました。本プロジェクトは、在来知により力点が置かれており、地元の言葉を理解して、地元民とコミュニケーションをとり、地元民が何を考え、何を語ろうとしているのかについて代弁する科学者、つまり地元での語りを「無毒化して包摂する」仲介者としての科学者の記述が散見されるなど、いくつか留意すべき点はありますが、プロジェクトの根底には、科学（研究）が有する還元主義（scientific reductionism）への批判があり、在来知に関心がないか、関心があるふりをしている科学者への異議申し立てというメッセージが埋め込まれていたように思います。こうした取り組みは、決して新規性のあるものではありませんが、かといって「古さ」を理由に捨象してよいものでもなく、常にどこかで意識しておかなければいけない、研究に対する姿勢なのだろうということを、私はフォーラムでの時間を通して考えていました。

今回のフォーラムに参加するにあたって、研究対象地域の歴史的身体をいかに学び、空間的方位を見定めながら、北極を対象とする科学研究を遂行していくためにはどうあれば良いのか、色々考えたものの、明確な解は何も出てきませんでした。準備段階からフォーラムへの参加に至るまで、私が常に気にしていたのは、「事実」をめぐる現在地をどう理解するかということであって、何が知られていて、何が知られていないのかについて、法則的科学の追

求によって明らかになったことのみに正当性を与えることはできないだろうという程度のことです。例えば、実証主義歴史学に対する批判を含む「戦略的」な態度として、生前の保苅実が、歴史学者としての立場から、「(ジミーが) 魚が空を飛んだといえば、本当に魚は空を飛んだと信じられる」と言ってのけたように、科学では到底処理しきれない（と考えられている）経験とどう向き合うか、私（たち）は、研究プロジェクト全体を見渡しながら、無毒化して包摂しないバランス感覚を共有しつつ、地元の語りに対して、もう少し真摯になってみる必要があるのかもしれません。昨今、世界の北極研究において、自然科学と人文社会科学、さらには地元との協働が求められている背景の一つは、この辺りにあるような気がしています。

学界短信

◆ 学会カレンダー ◆

2017 年 12 月 7-8 日 スラブ・ユーラシア研究センター冬期国際シンポジウム「ロシア革命と長い 20 世紀」
http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/sympo/2017winter/index-j.html

12 月 11-12 日 北極域研究推進プロジェクト（ArCS）国際シンポジウム　於北大
http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/jp/seminors/src/2017.html#17121112

2018 年 3 月 24-25 日 2017 年度日本中央アジア学会年次大会　於 KKR 江ノ島ニュー向洋
http://www.jacas.jp

7 月 5-6 日 スラブ・ユーラシア研究センター夏期国際シンポジウム

7 月 10-14 日 第 2 回 ABS（Association for Borderland Studies）世界大会　於ウィーン、ブダペスト　http://www.abs2018world.com/presentation/news/call-for-papers-borders-and-boundaries-in-asia/

2020 年 8 月 4-9 日 ICCEES 第 10 回大会　於モントリオール　http://iccees.org/

［編集部］

図書室だより

◆ ジェームス・ギブソン教授より蔵書受贈 ◆

本年、センター図書室は、カナダのヨーク大学名誉教授で、ロシア領アメリカの専門家として活躍された歴史地理学者ジェームズ・ギブソン氏から蔵書を寄贈いただくことになり、資料を詰めた段ボール 50 箱が、8 月初めに到着しました。

ギブソン教授の蔵書は、1999 年度に北海道大学附属図書館の大型コレクションとして採択され、ロシア語、英語の基本文献から稀少資料までを含む 2,544 冊が附属図書館に受入されたことがあります。

大型コレクションに採択されるしばらく前、シアトルで開かれた学会でお会いしたとき、教授は大学を引退すると話していましたが、実は研究からは引退しておらず、2014 年に 2 巻本の大きな史料集 *Russian California, 1806-1860 : A History in Documents* を Ashgate 社から刊

行されたのには驚きました。推察するところ、今回寄贈いただいた資料はこの仕事のために使ったものと思われ、ロシア領アメリカに関する文献をかなり徹底的に収集されたことが明らかです。全部で 1361 点におよぶ資料の中には、レメゾフのシベリア地図帖や、クルーゼンシュテルン世界周航記の付属図のそれぞれ精巧な復刻版、アメリカ国立公文書館の所蔵する露米会社文書のマイクロフィルム一式など、非常に高価なものまで含まれています。

かつて、教授は 1981 ～ 82 年にスラブ研究センター外国人研究員として滞在され、当時のスタッフと交流してたいへんよい思い出を残されているようで、18 年前に北大が蔵書を購入したことと併せて、今回の寄贈につながったものと思われます。

以上の経緯を踏まえ、図書室としてはギブソン教授の蔵書が将来的に最大限に活用されるように作業を進めてまいります。［兎内］

編集室だより

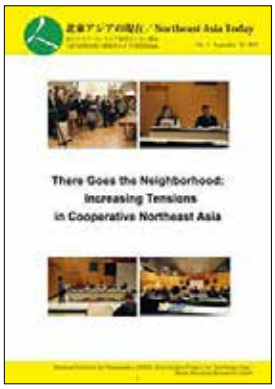
◆　スラブ・ユーラシア研究報告集 No. 9　◆
Positioning Asia and Kyushu in Shifting Global Politics
の刊行

上記の報告集がが刊行されました。

2016 年 12 月 17・18 日に北九州国際会議場でおこなわれた国際シンポジウム「流動する北東アジア　～紛争か、協力か～」の基調講演と第一セッションを成果としてまとめたものです。本シンポジウムは、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究推進事業」北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター拠点と、公益財団法人九州経済調査協会が主催したもので、とくに 12 月 17 日は九州経済調査協会創立 70 周年記念事業としておこなわれました。全文をダウンロードいただけます。ぜひご参照ください。［ブル／岩下］

http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publictn/slavic_eurasia_papers/no9/index.html

◆　*Northeast Asia Today* の公開　◆



NIHU 北東アジア地域研究推進事業北海道大学スラブ・ユーラシアセンター拠点（NoA-SRC）のオンライン・レポート第 3 弾が 9 月に公開されました。本号は、昨年 12 月に小倉で開催された国際シンポジウム “There Goes the Neighborhood: Increasing Tensions in the Cooperative Northeast Asia” で発表された報告のうち、「北東アジアにおける移民」と「北東アジアの地域秩序」をテーマにした報告のサマリーを収録したものです。*Northeast Asia Today* は英語版と日本語版を交互に出版することを目指しており、本号は英語版になります。こちらより閲覧できます。［加藤］

https://hokudaislav-northeast.net/publication/

会　議（2017 年 8 ～ 9 月）

◆　センター協議員会　◆

2017 年度第 3 回　8 月 30 日（木）

議題　1. 教授候補者（中央ユーラシア部門）の選考について
2. 教授候補者（地域比較部門）の選考について

2017 年度（持ち回り開催）　9 月 21 日（木）通知

議題　1. 教員の人事について　［事務係］

みせらねあ

◆　故中村泰三先生からの寄付金　◆

本誌 148 号（2017 年 2 月）でお伝えしたように、旧ソ連・東欧地域の経済・人口地理研究の泰斗であられた中村泰三先生（大阪市立大学名誉教授）が、2016 年 12 月 4 日に逝去されました。このほど、先生のご遺志により、多額の寄付金をいただきましたので、ご報告します。2006 年にも先生からご寄付をいただき、センターでは、1987 年に始められた鈴川基金奨励研究員制度と合わせて、鈴川・中村基金奨励研究員制度として、大学院生の北大への招聘に使わせていただいておりました。今回のご寄付により、この制度をさらに長く続けられる見通しとなりましたことについて、この場を借りて厚くお礼申し上げる次第です。今後も多くの院生の方々のお役に立てることができればと思っております。なお、センターでは、今回の寄付金に対する感謝の意味も込めて、今後、中村・鈴川基金奨励研究員制度という名前で運用していきたいと考えております。［仙石］

◆　シリーズ「ロシア革命とソ連の世紀」全 5 巻の刊行　◆

2017 年 6 月から 10 月にかけて、ロシア革命 100 周年を記念するシリーズ「ロシア革命とソ連の世紀」が岩波書店から刊行されました。ロシア革命と言うと日本社会では、社会主義には今でも意味があるのか、という議論になりがちですが、近年の歴史研究の成果、および旧ソ連諸国の現状は、ロシア革命を再考するためのさまざまな視点を与えてくれます。このシリーズでは、ボリシェヴィキに由来する定型的な語りからロシア革命史を解放して、臨時政府や民族運動指導者を含む多様なアクターを視野に入れ、なおかつ第一次世界大戦や内戦と関連づけながらロシア革命を見直しています。また、革命後に成立したソ連国家の営みをも広義の革命的試みと位置づけて、スターリン体制やソ連文化に関する最近の研究潮流に即した議論を展開し、さらには冷戦期の資本主義と社会主義の体制間競争がソ連内外で持った意味を論じました。体制間競争という課題が消えた後のアメリカなど旧西側諸国の迷走、ロシアや中国が今

も直面し続けている多民族大国の維持という課題の複雑性など、今日の世界の諸問題と歴史の関係を考えるために有益な材料を、このシリーズから多く見出すことができると思われます。

センターからは宇山が編集委員（第５巻担当）を務めたほか、共同研究員や元研究員・元院生を含む多くのセンター関係者が執筆に参加しました。帝国論や比較地域大国論、境界研究に関わるセンターの共同研究成果も直接・間接に反映されています。また、それらの共同研究でお世話になった方々を含め、アジア・ヨーロッパ・南北アメリカ各地の歴史の専門家たちに協力を仰ぎ、ロシア革命とソ連が越境的・世界的に持ったインパクトを浮かび上がらせることができました。このシリーズが多くの人に読まれると共に、ロシア革命史・ソ連史研究のさらなる発展と、他地域の研究との連携強化の基礎となれば幸いです。

シリーズの巻構成は以下の通りです。

第１巻　世界戦争から革命へ（池田嘉郎編）
第２巻　スターリニズムという文明（松井康浩・中嶋毅編）
第３巻　冷戦と平和共存（松戸清裕編）
第４巻　人間と文化の革新（浅岡善治・中嶋毅編）
第５巻　越境する革命と民族（宇山智彦編）

目次など詳しくは、岩波書店のウェブサイトをご覧ください。［宇山］
https://www.iwanami.co.jp/search/g10520.html

◆　人物往来　◆

ニュース 150 号以降のセンター訪問者（客員、道央圏を除く）は以下の通りです（敬称略）。［仙石／大須賀］

8 月28 日　Natalia Ryzhova（極東連邦大、ロシア）
8 月31 日　菅井健太（東京外国語大・院）
9 月 1 日　田中沙季（早稲田大・院）
9 月 9 日　森下嘉之（茨城大）
9 月11 日　櫻間瑛（日本学術振興会特別研究員）
9 月18 日　ダツェンコ　イーホル（名古屋大・院）
9 月20 日　Simon Ammosov（北東連邦大・院、ロシア）、Yaroslav Lopukhov（極東連邦大・院、ロシア）
9 月23 日　Aisulu Khairuldayeva（カザフ国立大・院）
9 月25 日　金沢友緒（日本学術振興会特別研究員）
10 月 1 日　Wang, Yuhan（センター研究生、中国）
10 月 7 日　Kuanysh Murzakhojayev（カザフ国立大・院）
10 月11 日　ヨフコバ四位エレオノラ（富山大）
10 月12 日　Paul Wexler（テルアビブ大、イスラエル）
10 月23 日　Shang, Yue（中国現代国際関係研究院）
10 月30 日　藤田智子、前田しほ（人間文化研究機構）
11 月 4 日　Wu, Fengcheng（黒龍江省社会科学院、中国）、Da, Zhigang（同）、An, Zhaozhen（同）、Dong, Xiaozhong（同）
11 月 5 日　Aisen Larionov（北東連邦大、ロシア）
11 月 9 日　Steven Ivings（京都大）

◆　研究員消息　◆

野町素己研究員は7月30日～8月7日の間､「国際歴史言語学会」出席のため､米国に出張。

田畑伸一郎研究員は8月7～27日の間、ヘルシンキオフィス運用業務（北海道大学欧州ヘルシンキオフィス)、国際交流関係打合せ（在スウェーデン日本大使館、JSPSストックホルム研究連絡センター）及びUarctic学長会議出席のため､フィンランド､スウェーデン､スコットランドに出席。9月10～14日の間、聞き取り調査、意見交換及び資料収集のため、ロシアに出張。

ウルフ・ディビッド研究員は2017年9月6～15日の間、カンファレンス“The Tsarist/Soviet Empires and the History of Modernity in Asia”出席及び資料収集のため、ドイツに出張。10月5～17日の間、“Joint OSW-SRC Seminar”出席、“The Great Russian Revolution of 1917: One Hundred Years of Study”出席､資料収集及び研究打ち合わせのため､ポーランド､ロシアに出張。

越野剛研究員は9月14～23日の間、国際学会「アブラハム週間」参加及びプーシキン博物館での調査のため、ロシアに出張。9月7日～10月1日の間、“8th Symposium on European Languages in East Asia”出席及び研究打合せのため、台湾に出張。10月17～20日の間、上海師範大学で開催される国際ワークショップに参加及び研究打合せのため、中国に出張。

岩下明裕研究員は8月29日～9月3日の間、現地調査のため、ロシア、中国に出張。10月1～11日の間、研究打合せ、“Joint OSW-SRC Seminar”出席及びセミナー“A New Eurasian Geopolitics? Views from Japan”出席のため、ポーランド、英国に出張。10月12～14日の間､“The Forum of Chinese Academy of Social Science（2017）”出席のため､中国（フフホト、内モンゴル）に出張。

長縄宣博研究員は10月4～10日の間、“18th CESS Annual Conference”出席及び研究打合せのため、米国に出張。

宇山智彦研究員は10月18～26日の間、学術会議「アラシュからカザフスタン独立まで」､「ユーラシア協力の諸問題」､「アラシュ自治史研究の諸問題」出席、関連研究者との意見交換及び博物館調査のため、カザフスタン、ロシアに出張。

兎内勇津流は10月23～29日の間、国際学術会議「大ロシア革命と極東」出席のため、ロシアに出張。

目　次

研究の最前線 1

2017 年度冬期国際シンポジウム《ロシア革命と長い 20 世紀》開催予告／国際シンポジウム「北極域における環境・開発・国際関係」開催予告／ NIHU 北東アジア地域研究事業国際シンポジウム「安全保障の視点から考える移民・難民と環境問題」開催報告／ 2017 年度特任教員（外国人）決定／黒竜江省社会科学院代表団の訪問／ハイルルダエヴァ氏とムルザホジャエフ氏の滞在／専任・非常勤研究員セミナー／研究会活動

人事の動き 8

教授／事務職員

北極圏大学（UArctic）学長フォーラムに参加して
by 高橋美野梨 9

学界短信 11

学会カレンダー

図書室だより 11

ジェームス・ギブソン教授より蔵書受贈

編集室だより 12

スラブ・ユーラシア研究報告集 No. 9 *Positioning Asia and Kyushu in Shifting Global Politics* の刊行／ *Northeast Asia Today* の公開

会議 13

センター協議員会

みせらねあ 13

故中村泰三先生からの寄付金／シリーズ「ロシア革命とソ連の世紀」全 5 巻の刊行／人物往来／研究員消息

2017 年 11 月 27 日発行

編集　大須賀みか
編集協力　宇山智彦
発行者　仙石　学
発行所　北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター
060-0809 札幌市北区北 9 条西 7 丁目
Tel.011-706-3156、706-2388
Fax.011-706-4952
インターネットホームページ：
http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/